

2019年11月17日 礼拝メッセージ

聖書:テサロニケ人への手紙第二 2章1~12節

説教:主の日を待ち望む

はじめに

パウロがギリシャの港町であるテサロニケに二度目の伝道旅行で立ち寄り、そこで福音を語ったとき、多くの信仰者が起こされ、すぐに教会が建てられました。ところが、さあこれからというときに、町に住むユダヤ人から激しい迫害を受けてパウロは町を去らなければならなくなります。パウロを町から追い出したユダヤ人は、当然のことですが次の標的として教会を迫害していきます。教会は大丈夫だろうか。パウロは大変心配し、同労者であったテモテを派遣して教会の様子を見てもらうことにしました。

やがて戻って来たテモテの報告を聞いてパウロは教会に二つの手紙を書きます。今朝開いているのはその二通目の手紙となります。今回は1章10節に書かれている、主イエスが私たちの間で「感嘆の的となる」ことに注目し、私たちが予想もしていなかった驚くようなすばらしい救いがそのとき与えられていく。だから主が感嘆の的となる。そのような意味だと言いました。

続く今日の箇所には、主の来臨のときにどんな事が起こるかが書かれています。このことが今の私たちとどのような関係があるのか、共に考えてまいります。

1 主の来臨について

1) 苦しみに向き合うよりも

パウロが、テサロニケ教会の信仰のことで最も心配したことは、教会の中に主の日がもう間もなく来る、あるいは主の日がすでに来たかのように言う人たちが現れたことでした。そこにはある程度同情すべき事情がありました。厳しい迫害を受けていくうちにこんな考えが浮かんでくる。「苦しみを忍耐するなんて何か意味があるのか。そんなのは無駄である。地上のことよりももっと天国に目を向け、天の御国を待ち望むことこそ敬虔なクリスチャンの姿である。」そう言って、働こうと思えば働けるのに、仕事を辞めてただぶらぶらする者さえ現れる。ただぶらぶらしていたのでは格好がつきません。主の日が間もなく来るとか、もう既に来たとか、そう言って緊張感をあおり立てるようになる。ここまで来るとカルトの一步手前です。

2) 主の日がすでに来たかのような話

でも、ただ「主の日はすぐに来る」と言っただけではだれも信用しません。どうしても証拠が必要になる。そこで、自分は霊に満たされていると言いながら、「主の再臨は間近である」と叫ぶ者が出る。あるいはパウロの名前を使って、パウロも主の日は近いと言っている、そんな情報を流す者もいた。それで惑わされる人たちが出て来た。

昔の人たちは愚かだったので簡単に嘘の話を信じてだまされた。でも今は、たくさんの情報が手に入り正しい判断できるのだからだまされるはずがない。もしそう思っている方がいたらそういう人こそ危ない。フェイクニュースということばはもう当たり前になりました。これのこわいところは、どんな嘘であっても繰り返し大声で叫び続ければ、なんとなく本当に聞こえてくる。なぜか。心の中のどこかに不安な気持ちがあるからです。そこに付け入ってきて嘘でも本当に聞こえてくる。私たちはそういう弱さを持っている。

3) だまされてはいけない

不安ということ言えば、おそらく世の多くの人たちは、自分たちが住んでいるこの地球の将来について漠然とした不安を抱えています。それは普段は表に出てこない。でも、八年前の三月十一日、東北地方の海岸に津波が押し寄せ、それに続いて原子力発電所が大きな事故を起こしたとき、一気に不安が表に出て来る。私は、これは世の終わりの始まりかも知れない、そんなことを思いながらテレビを見ておりました。

では、世の終わりについて聖書はなんと言っているか。3節。「どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。」

いつの時代にも「世の終わりは近い」と叫ぶ者がいます。しかしパウロははっきりと言う。「どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。」急に今日明日、突然に世界の終わりが来るようなことは絶対はない。必ずしるしがある。確かに自然災害とか戦争は起きることは他の聖書箇所に書かれている。でも、それはあくまで結果として起きてくる出来事であって、直接のしるしではない。まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ない。不法の者

が現れるということがしるしがある。そこがポイントです。

2 不法の者

1) まだ現れていない

ではいったい誰が「不法の者、あるいは「滅びの子」なのかということになる。それを誰もが知りたいはずです。それだけではない。ここには「引き止めているものがある」とか、「不法の秘密」とあるけれど、それは何か。知りたくてうずうずしているかも知れません。あらかじめ申し上げますが、残念ながら聖書の専門家でもこの答えはわからないそうです。かつて、「不法の者」とはクリスチャンを大量虐殺したローマ皇帝ネロのことではないかと言う研究者もいたそうです。でも、それは当たっていない。なぜなら、不法の者が現れた後に必ず主の日が来なければならない。でも主の日はまだ来ていません。ですから皇帝ネロではなかった。

2) だれが不法の者になるのか

とにかく今はまだ不法の者は現れていないと思ってよい。でもこれから必ず現れるのですから、あらかじめ不法の者に関する情報を知っていた方がよい。それが4節です。「不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。」

主の終わりの日が近くなると、まさに誰を神とするのか、信仰の戦いが起きると書かれている。不法の者は自分を神とします。神の座に座って自分を拝めと強制します。何も初めて聞くことではありません。かつて日本では、天皇は現人神であると言われ、教会でも天皇を拝めと強制された時代がありました。八月に天に召された吉田顕司兄のお父様は牧師をされていましたが、「天皇は神ではない」と言ったことから牧師をやめさせられ、所属していた教団からも追放され非常に辛い思いをされたと聞いたことがあります。でもこれは過去の話ではない。この先も同じことが起こりうる。マタイの福音書24章22節にこうあります。「もしその日数が少なくされないなら、一人も救われなんでしょう。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。」

主の日が近くなるとき、おそらくかつて教会の牧師が迫害されたような試練よりもっと激しいことが起こることを覚悟しなければなりません。そう言われるとなんとなく不安になります。でも8

節が私たちの慰めです。「その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。」

3 主イエス・キリスト

1) 主の十字架

今私たちが住んでいる国は、世界中の中で最も安全で平和なところに見えます。でも実は、この世界は真理を愛する者と、真理を信じないで不義を喜ぶ者たちとのすさまじい戦いが繰り広げられている。それが聖書が語るこの世の姿です。とは言っても、目に見えるようなものではないので、ある人は信じられないかも知れない。

でもこの世界に一度だけ、この戦いが目に見える形で提示されたことがありました。私たちの主であるイエス・キリストが十字架におつきになったときです。この方はこの世界を造られたのに、世の人々は王としてこられたイエスを認めず、真理そのものである方が憎み、十字架につりました。12節にあるように、彼らは真理を信じないで不義を愛していたことを、自らの手で証明しました。これは他人事ではありません。私たちは、主の日が来る前に不法の者が現れると聞いて「ああ恐ろしい」と言ったかもしれませんが、なんのことはない、恐ろしいのは自分だったのです。

2) 主の来臨のとき

7節には「すでに不法の秘密が働いている」と書かれています。「秘密」ですからそれがなんであるかははっきりとはわからない。でも、ある程度はわかります。難しいことではない。私たちの幸せはどこにあるか。世の人たちはなんと言っているかを見ればよい。お金をたくさん持ち、有名な大学に入り、有名な会社で働き、人もうらやむ地位に就く。由緒ある家柄の家に生まれであればもっとすばらしい。それが幸福だと思って疑わない。人々をそう思わせるような秘密の力が働いているとも言えます。

罪を悔いて主イエス・キリストに立ち戻れば本当の幸せを手に入れることができる。そんなことを言ってもなかなか信じません。それでも数は少ないかも知れませんが、世の常識に疑問を持ち、真理を求めて悩みながらも教会の門をたたく方がいます。

主の来臨の日、誰が救われ、誰がさばかれいくのか。それははっきりしています。真理を愛するの、それとも真理を信じないで不義を愛するの。この二つに一つ。

最後に言います。私は頭が悪いので何が真理かよくわからない。だから大丈夫かどうか不安です、と言う方。安心して下さい。頭の善し悪しではありません。聖書で言う真理とはそういう意味ではない。

マルコの福音書5章33節に「彼女は自分の身に起きたことを知り、恐れおののきながら進み出て、イエスの前にひれ伏し、真実をすべて話した」とあります。律法では、血を流すことは罪の汚れでしたから、人に触れてはならないと定められていました。それなのにこの女性は治りたい一心で隠れてイエスの衣に触れてしまいます。そのことを告白する。それが「真実」と呼ばれることばで表現されている。心理を愛するとはこのようなことです。

あの女性のように、私たちがすべきことはただ一つです。自分のうちにあるものをそのまま主に告白し続けていくこと。もしそうしているならば、主の日がいつ来ようとも、不法の者がいつ現れようとも、私たちは動揺する必要はありません。主の御前で聖であり、責められるところない者であると、主はその日、父なる神の前でとりなしてくださいと信じます。